

平成24年度 文部科学省

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」採択事業

産官学地域協働による人材育成の

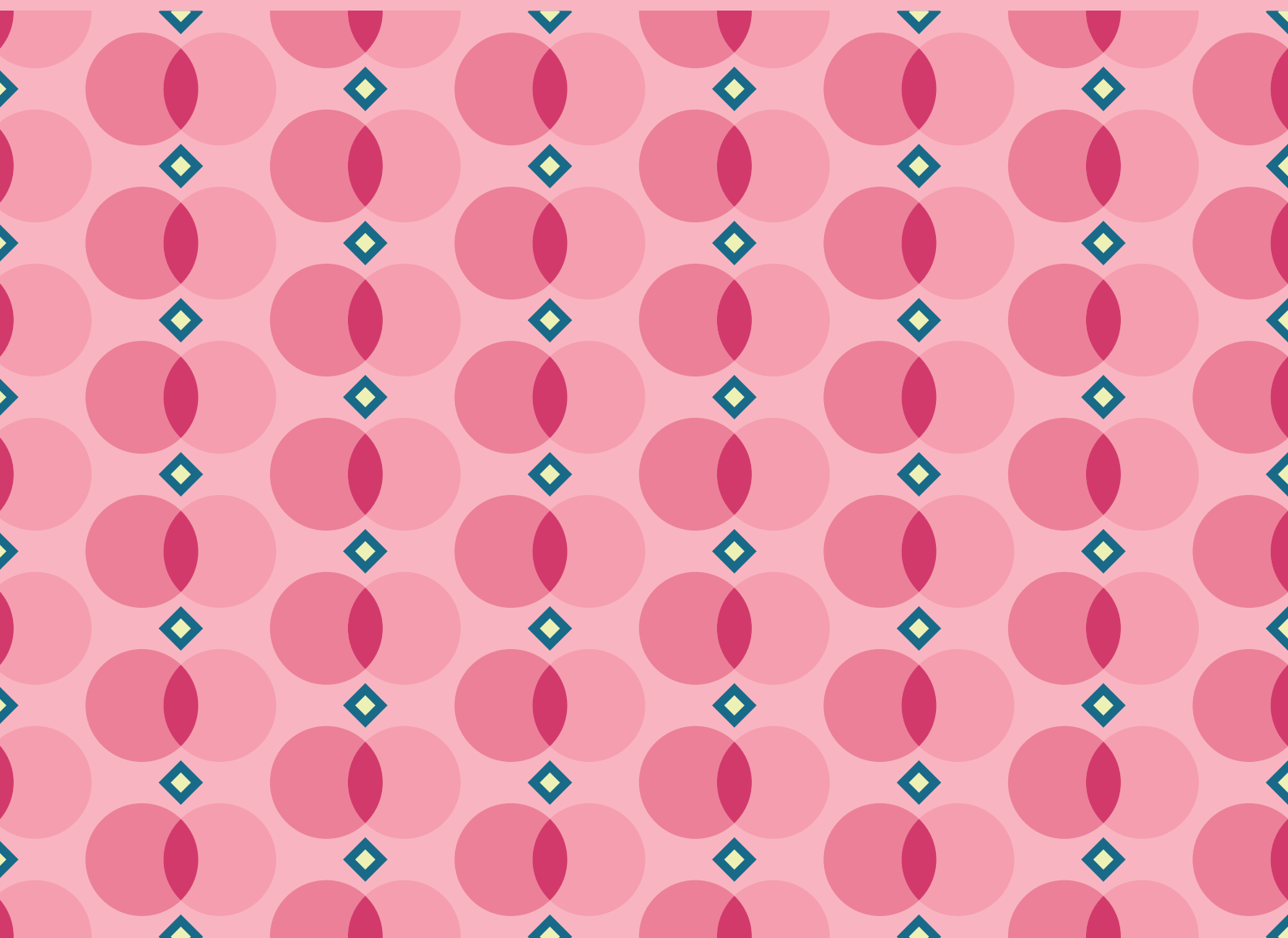
環境整備と教育の改善・充実

大阪音楽大学

大阪音楽大学短期大学部

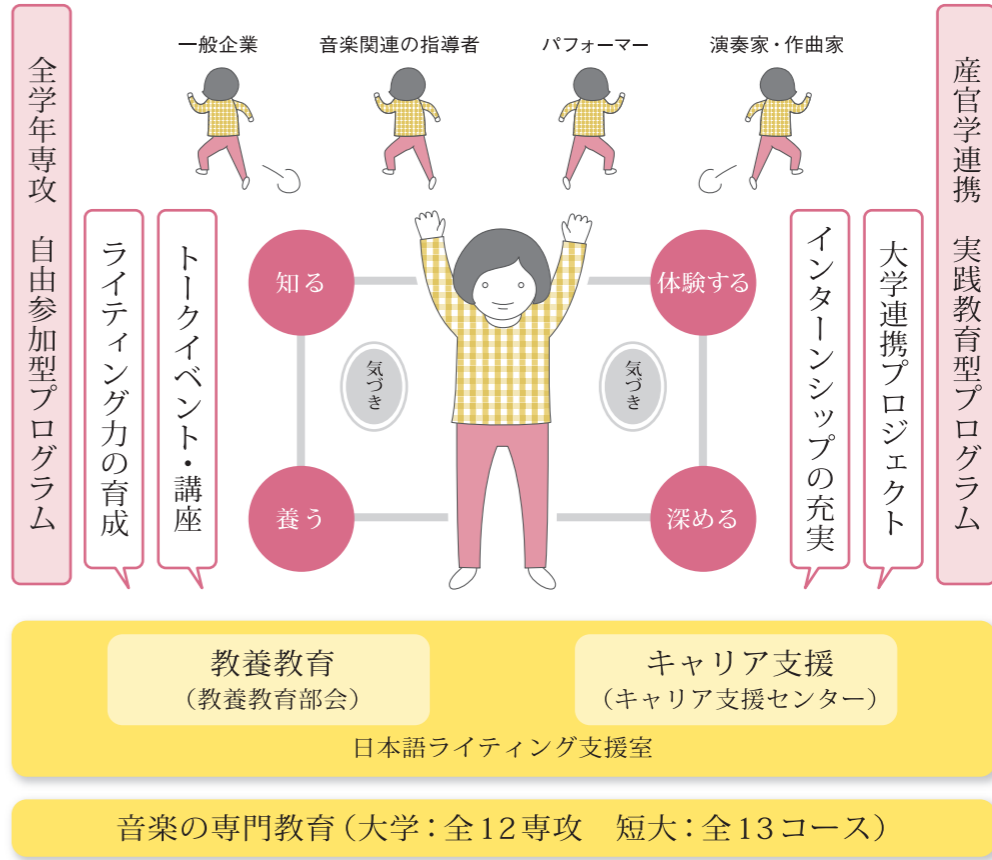
平成26年度報告書

大阪音楽大学 大阪音楽大学短期大学部 日本語ライティング支援室



## 事業趣旨

本学は、大阪、兵庫、和歌山の14大学の協働で「産官学地域協働による人材育成の環境整備と教育の改善・充実」事業に取り組んでいます。



## 平成26年度の取組

本学は、文部科学省より平成24年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の採択を受け、3年間の事業計画のもと、大阪、兵庫、和歌山の14大学の協働で、「産官学地域協働による人材育成の環境整備と教育の改善・充実」事業に取り組んでいます。変動する社会の中で、学生が音楽専門単科大学生・短期大学部生としての強みを活かす、卒業後にきちんと自立していくことができるように、さまざまな就業力育成支援の取組を行っています。

取組最終年となる今年度は、連携大学との交流をさらに深め、産官学連携のPBLモデルプログラムを共催したほか、今後も連携を継続していくためのプラットフォーム構想を立てるなど、協働のメリットを活かした教育体制作りを推し進めました。

本学独自取組としては、学生の進路状況に合わせ、さまざまな働き方のロールモデルを知るトークイベントを開催したり、ライティングなどの「伝える」力を育成する講座を設けたりして、きめ細かなサポートを行いました。本事業終了後もこの成果を活かし、他大学や産業界等と連携してキャリア支援体制を続けていく予定です。

「産官学地域協働による人材育成の環境整備と教育の改善・充実」事業 連携大学

和歌山大学・大阪府立大学(幹事校)・兵庫県立大学・追手門学院大学・大阪音楽大学・大阪工業大学・大阪成蹊大学・関西外国語大学・摂南大学・帝塚山学院大学・芦屋大学・大手前大学・神戸学院大学・大阪音楽大学短期大学部

本事業のHP <http://www.sneeds-kansai.jp/>

## 【テーマB】 インターンシップ等の取組拡大

なお今年度は、これまでの事業に加え、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【テーマB】」の採択も受けました。これは、キャリア教育の中でも特にインターンシップ等の産学連携教育に着目したもので、2年間の事業計画のもと、中小企業を含む関西の産業界等と、大阪、兵庫、和歌山の9大学が連携して、広域インターンシップ等の拡充を目指す取組です。

取組開始年となる今年度は、大学連携ワーキンググループの定期開催により、各大学におけるインターンシップの問題点を抽出し、共有をはかりました。各大学からインターンシップ運営に直接関わる教職員が集まり、事前事後学習の問題点や、実習先との調整における問題点など、さまざまな課題を議論しました。課題は年度末発行の報告書『インターンシップ これが問題だ！集』(仮題)にまとめ、教職員、学生、産業界等に広く配布する予定です。

また、取組のもう一つの柱として、学生と企業等のマッチングに必要な不可欠な専門人材の養成も課題です。今年度は連携大学合同の研修会や産学交流会を開き、教職員が積極的に参加して、企業側の目線を知るようにするなど、産学連携教育について問い直す一年となりました。

【テーマB】インターンシップ等の取組拡大  
〈地域インターンシップの体制整備を通じたキャリア教育の充実〉事業 連携大学

和歌山大学(幹事校)・大阪府立大学・兵庫県立大学・追手門学院大学・大阪音楽大学・大阪成蹊大学・大手前大学・神戸学院大学・大阪音楽大学短期大学部

## 取組体制について

本学において、これらの「産業界ニーズ事業」の取組は、キャリア支援センターおよび日本語ライティング支援室(教養教育部会)が中心となって進めています。

キャリア支援センターは、主にインターンシップの企画立案・運営を担い、就職支援やキャリアデザイン支援等と並行して取組を進めています。一方の日本語ライティング支援室は、キャリア教育と教養教育をつなぐ本学独自の取組として、平成22年度に設置したものです。教養教育の授業科目を担当するほか、キャリア支援センターと連携して、学生が社会について「知る」「体験する」「深める」「養う」という四つの視点から、本事業のためのさまざまな企画を立案・実施しています。また、本事業においてこれまで調査してきた「産業界が大学に求める教育」を、音楽大学としてどのように受け止めるか検討し、学内に広げていくことも役割です。

教養教育部会では、学生がこれからの「音楽人」として持つべき力として、日本語を書く力・話す力を重視しています。本学の教育の中心は、音楽の専門的な知識や技術の修得ですが、産業界等では、音楽を「社会に伝える」ための力も求められています。音楽についての確に語る能力や、



↑平成23年度報告書



↑平成24年度報告書



↑平成25年度報告書

日本語ライティング支援室のHP <http://ongakutokotoba.com/>

自らの企画をわかりやすく説明する能力、資料を読みこなして課題を発見していく能力など、日本語の力を基盤としたコミュニケーション力の育成支援は、どのような進路を選ぶ学生にとっても必要であると考えられます。日本語ライティング支援室では、「知る」「体験する」といった学びの中にもライティングを取り入れ、実習日誌の書き方等を通じて、さまざまな指導を行っています。

### シンポジウム「ライティング支援の未来像 ―社会との効果的な連携と支援ツールの活用―」

平成26年11月8日(土)  
【主催】関西大学・津田塾大学(文部科学省 平成24年度 大学間連携協同教育推進事業)〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援事業にもとづく  
【本学講演】音楽大学におけるライティング支援  
―「社会」を意識して書くこと―

# 活動報告

本事業のための活動をご紹介します。



## 大学連携PBLモデルプログラム

PBL (Project Based Learning)とは、「課題解決型学習」と呼ばれる教育手法のことです。グループワークを通じて学生が「答え」のない課題に取り組み、課題発見力や解決力、議論する力などを養っていくものです。今年度は夏休みを利用して2泊3日の合宿形式で、14大学合同のモデルプログラムを実施しました。本学からは5名の学生が参加し、他大学生とともに、関西の企業・自治体からのリアルな課題に挑戦しました。終了後は次のような感想がありました。

### 学生の声

- 長時間の議論を経験できてよかった。普段は簡単に結論を出してしまうことが多いけれど、「答え」のない問題をしっかりと考えるのは重要なこととわかった。
- 企業の方が自分の話を熱心に聞いてくれるとは思わなかった。嬉しかった。もっとプレゼンスキルを身につけたい。
- 議論で反対意見を言われると、攻撃されている気がした。音大では、上下関係や協調性を重視しすぎていて、意見を言う経験が足りなかったとわかった。

### 企業・自治体の声

- 議論の過程が良かった。大学生がどのようなことを考えているか、マーケティングリサーチができたのが企業のメリット。
- プレゼンテーションの上手な学生が多い。特に音大は演奏という武器がある。もっと連携したいと思った。
- リサーチや課題発見力は不足。社会を観察できていない。学生ともっと交流して、企業の現実を伝えたい。

このモデルプログラムの実施により、教職員もファシリテーターの経験を積むことができました。本学ではPBLを用いた教育事例がまだ少ないのですが、この経験を活かし、次年度から積極的に産学連携のアクティブラーニングを展開していきたいと考えています。

## 大学合同フォーラム ランチタイムミーティング

一昨年度、昨年度に続き、今年度も14大学による合同フォーラムを開催しました。連携事業および各大学独自取組を報告したほか、各大学から集まった学生リーダー会による提案「行動から始まる私たちの大学」学生から学生へ届けよう」も発表されました。

この提案を受けて、フォーラム終了後には、本学でも学生主導によるランチタイムミーティングが実施されました。大学の教育体制を変えるには、教職員だけでなく学生自身の行動も必要であるとの視点から、まずは学生と教職員の交流の場を作ることを企図したものです。学生4名と教職員2名が参加し、一緒に昼食をとりながら、進路に関する悩みや音楽の楽しさ、音楽大学と他大学の違いなど、リラックスして語り合いました。

### 合同フォーラム「みんなでつくる明日の人材」

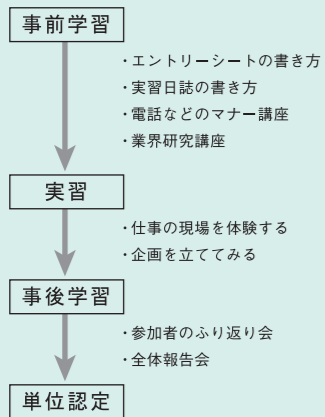
平成26年9月8日(月)  
大阪府立大学 学術交流会館にて  
〔内容〕大学独自取組ポスター発表  
学生リーダー会による学びの提案など  
**学生と教職員のランチタイムミーティング**  
平成26年11月12日(水)  
学生サロン「ばうぜ」にて  
〔内容〕進路に関する悩み相談など

### PBLモデルプログラム 日程と課題

日程  
平成26年8月19日(火)～21日(木)

課題  
〔若者をターゲットにした南海難波駅周辺の再開発プラン〕(南海電気鉄道株式会社より)  
〔和歌山県産野菜を使った冬向けのジェラート開発〕(キミノーカより)  
〔高齢化の進む大規模団地(神戸市・明石市)の活性化〕(兵庫県庁より)

### インターンシップの流れ



## インターンシップ 事前事後学習の充実

本学では、主に音楽関連企業や団体等にご協力いただき、夏期と春期にインターンシップを実施しています。普段は演奏の実技を学んでいる学生がコンサートホールの運営を体験したり、音楽教室の講師を目指す学生が実際に教育業務を体験したりすることで、企業や社会の事情を知り、仕事に対する興味や関心を高め、適性を客観的に考えることができるプログラムです。

実習の効果をより高めるために、キャリア支援センターでは、本事業を通じて、事前事後学習の充実をはかってきました。例えば、キャリア支援センターと日本語ライティング支援室が連携して、エントリーシートや実習日誌の書き方講座を実施しています。また企業、業界研究の必要性と方法を伝えることや、名刺交換や電話応対などのマナー講座の充実、実習後のふり返り会の実施により、「何を学んだか」を学生同士で共有してから全体報告会を開催するなど、さまざまな学習内容を盛り込んだ事前事後プログラムを行っています。

## トークイベント 「音楽講師、あれこれ」

「社会と仕事を知る」ための取組として、昨年度より実施しているトークイベント「音楽講師、あれこれ」を今年度も開催しました。これは学生が将来を考えるためのロールモデルの一つとして、彼らにとって最も身近な「音楽の仕事」といえる音楽講師をお呼びし、お話をうかがうものです。聞き手としては、まだ進路について考えられていない1～2年生を主な対象とし、自分の将来像をイメージしてもらうことを目指しました。ゲストには、ヴォーカル、ユーフォニアム、チェロの若手講師として活躍している卒業生をお招きしました。

ひとくちに「音楽講師」とはいうものの、働き方はさまざまです。お招きした卒業生の方々も、音楽教室に所属して教える、部活動やアマチュアバンドの指導者として教える、個人教室で教えるなどのさまざまな形で活躍されています。また卒業後すぐに講師として教え始めたという方だけでなく、他の業種を数年間経験されたから講師の職についてという方もおられ、動めるまでにはさまざまな経緯があります。

トークイベントでは、「卒業後、一般企業でしばらく働いたことが大きな経験になった。いろいろな人に出会うことで音楽の幅も広がる」といった話や、「学生のうちに音楽の仕事をしている知人を増やし、コミュニケーションに入ること」「生徒の年齢層やニーズはそれぞれ異なるので、相手をよく見て、教えるための引き出しを増やしておく」といったコミュニケーションに関するアドバイスが繰り返されました。また、「音楽で食べていくことは可能なのか」という学生にとって一番気がかりであるテーマについても、意見をうかがうことができました。

### 学生に聞きました

#### トークイベントに参加して

- 将来的に音楽と関わっていきたくは難しいのかなと思っていましたが、お話を聞いて頑張ろうと思いました。卒業までにどうやって動くかを考えたいです。まずは名刺を作ります! (声楽専攻・2年生)
- 今まで、音大生＝クラシックという概念があって、自分のしたいこともクラシックの枠の中だけで考えていた。でも、音楽の道でやっていくな、相手の求めているものや、どうしたら喜んでもらえるかを考えなくてはいけないと思った。(ピアノ専攻・2年生)

### トークイベント「音楽講師、あれこれ」

4月23日(水)  
北野真由子さん(ヴォーカル)  
・一般企業勤務時代  
・音楽教室の講師の仕事



7月11日(金)  
千賀由起さん(ユーフォニアム)  
・大学卒業後の音楽の続け方  
・バンド指導の仕事



11月18日(火)  
藤原匡匡さん(チェロ)  
・路上ライブからレッスンへ  
・音楽で食べていくこと

### 名刺講座・PV講座

「伝える」力を育成する講座として、昨年度に続き、名刺作成講座とPV作成講座を実施しました。名刺講座は毎月開催し、昼休みの30分を使って、音楽活動用や就職活動用など、各自の活動にあわせて名刺を作成するものです。配る相手や状況をイメージし、どのような情報を掲載すればよいか、自分のアピールポイントはどこなのか、主体的に考えるように促します。名刺講座に参加した学生は、他の講座やイベントにも参加することが多く、この講座が「自分から動く」ことのきっかけとなっているようです。

PV講座は、ビジュアルアーツ専門学校大阪講師の三丸聡さんをお招きし、PV（プロモーション・ビデオ）の撮影や編集方法を学びます。今年度は前期に3回の連続講座を実施し、課題曲を元に3分程度のPVを作りました。学生自身が出演者とカメラマンの両方を経験することで、自分の姿を客観視し、「伝える」とはどういうことかを実践的に学びます。わずかな角度の違いや画像の並べ替えなどによって、意図的に異なるメッセージを発信できるという発見は、音楽活動にも活かせるものです。教室や中庭などの見慣れた風景が、撮影や編集によって全く違った印象になることに、学生たちは驚いた様子でした。



### ライティング力の育成 個別相談受付

日本語ライティング支援室では、さまざまな文書の書き方について、個別相談を受け付けています。今年度は、平成26年4月～平成27年2月で180件程度の相談を受け付けました。主な相談内容は下表の通りで、授業レポートから音楽活動関連、就職活動まで幅広く対応しています。

これらの相談を受け付けることで、日本語ライティング支援室では、入学時から卒業時まで、学生の成長や悩みを長く観察し、さまざまな働きかけをすることができるようになりました。例えば1年次にレポートの相談で入室した学生が、2年次には音楽活動のチラシや企画書作成などで入室するようになり、さらに3年次にはインターンシップや就職活動、教員採用試験の文章について入室するといったつながりが生まれ、文章表現のスキルアップに加えて、自己の内面の掘り下げや音楽との関わり方まで、学生とともに考えるケースが増えていきました。その蓄積をふまえて、今年度は新入生に向けての働きかけ方を工夫するなど、より積極的に取組を行いました。

また、学生側の意識についても変化が見られました。平成22年度に受付を開始した当初は、教職員に促され、意欲のないまま添削を受ける学生が大半でしたが、入室者が増えるにつれて、書く前の構想段階で積極的に相談に来るケースが増えました。学生からは「課題を出されても、何をどのように書けばいいのかわからない」「対面でのコミュニケーションは好きだが、文章で伝えるのは苦手」といった声が多く、「書くこと」への苦手意識が目立ちます。この問題の解消は容易ではありませんが、構想段階での働きかけを繰り返し、目的を意識して文章を書き上げる経験を増やすことが必要です。日本語ライティング支援室では、

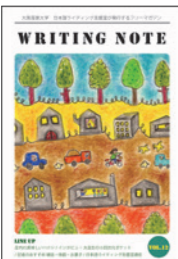
### 「学生記者」プロジェクト

日本語ライティング支援室では、平成23年度より、学内向け広報誌としてフリーマガジン『writing note』（B6判フルカラー、16頁）を発行しています。学生や教職員に向けて支援室の活動を紹介するほか、昨年度からは「学生記者」を募集し、課外活動として雑誌作りを体験させる取組も始めました。今年度発行の第12号では9名、第13号では7名の学生が記者として参加し、企画や取材、編集、レイアウト作りなどを体験しています。主な記事は左下の通りです。

### 記事作りの流れ

記事作りは、企画（テーマの掘り下げと決定）↓材料集め↓選ぶ・組み立てる↓レイアウト検討↓執筆↓校正という流れで行っています。2～3ヶ月の間、週に1度ずつ集まってミーティングや作業を行い、学外での材料集め（取材）には昼休みや放課後、休日などを利用します。

学生が作業を抱え込んでしまわないように、スケジュール管理やアドバイスをスタッフが積極的に行うようになっていますが、スタッフがもっとも重視しているのは学生記者自身の意欲です。音楽で自己表現をすることに長けている学生たちですが、文体を工夫したり、画像をあしらって魅力的に見せたりするなど、雑誌ならではの伝え方を学び、ポートしています。



↑フリーマガジン『writing note』の表紙と学生記者担当記事

### 『writing note』主な記事

第12号 平成26年7月

- ・特集「庄内 美味しいハナシ」
- ・インタビュー「大音生の四次元ポケット」
- ・記者のおすすめ「雑誌」「映画」「お菓子」

第13号 平成27年1月

- ・特集「数であらわす大音生」
- ・記者のおすすめ「なにわ運歴めぐり」
- ・記者のおすすめ「京都で遊ぼう！」



↑学生記者によるインタビューの様子



↑学生記者による編集作業

### 社会人としてのマナー

また、取材相手にアポイントメントを取りついたり、原稿をやり取りしたりする際には、メールの書き方に注意が必要です。著作権の扱いや固有名詞の正確な表記なども、初めて注意されるといえる者が少なくありません。締め切りを守るといった責任感も重要です。マナー意識をきちんと持ち、日本語ライティング支援室を社会経験の場ととらえ、きちんと仕事を仕上げる体験をしてもらいたいと考えています。

### 今後の課題

本事業は今年度で終了しますが、これらの取組は今後も継続していく予定です。ライティングを基盤にした「伝える」力の育成や、進路を考えるトークイベント、インターンシップなど、さらに充実させていきたいと考えています。

また連携体制については、3年間の成果として連携大学とともに「産学協働人材育成機構（AICE）」を設立し、次年度から試験的に運営していく予定です。関西に根づいた人材育成を目指し、産官学の情報共有や合同PBLなどをより積極的に行っていきたいと考えています。

### 学生に聞きました

- ピアノ専攻 2年生 石橋由樹子さん  
音楽学専攻 2年生 清山留美さん

- 2号に渡って学生記者をしてみ、話題作りの難しさを知りました。インタビューではどうすれば面白い答えを引き出せるか、悪戦苦闘しました。でも積極的に人と話す良い機会になりました。(石橋)
- 読みに興味を持ってもらえる書き方を考えるのが、大変でもあり、面白くもありました。先生方のサポートもあり、楽しんで活動できました。文章を書く力も身についたように思います。(清山)

### 主な相談内容

- |               |  |
|---------------|--|
| 授業・教育実習       | ・授業レポート<br>・教育実習レポート<br>・教育実習のお礼状                        |
| 音楽活動          | ・プログラムノート<br>・チラシ<br>・案内状・お礼状<br>・企画書<br>・申請書・報告書<br>・名刺 |
| 就職活動・インターンシップ | ・エントリーシート<br>・履歴書<br>・採用試験の小論文<br>・添え状・メール               |

多様な文書作成に対応できるというメリットを活かし、学年を問わず、卒業まで何度も入室するように促しています。入室の際には、どのような文書であれ「伝える」意識を持つて書くことが重要であり、文章執筆は卒業後も求められる力であることを繰り返し伝えていきます。

それらの働きかけについて、本学研究紀要で報告をまとめています。次年度以降は授業との連携を強めたり、学生同士の相互評価を取り入れて、自信をつけさせたりするといった活動も行っていきたいと考えています。

大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部  
日本語ライティング支援室の実践報告  
―構想段階と推敲段階における指導事例集―  
平成27年3月発行  
大阪音楽大学 研究紀要 第五十三号  
「目次」1.日本語ライティング支援室の概要  
2.構想段階における指導（準備状況の確認／文章の全体像把握／書く材料の可視化と構成の検討）  
3.推敲段階における指導（推敲の大小／順序・段落の組み替え／内容の過不足の修正／最終校正）

平成 27 年 3 月 25 日 発行

発 行 大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部  
編 集 日本語ライティング支援室  
取組スタッフ 山下豊（事業取組担当者）  
高橋典子・増田祥子・中村聡・諸江和枝・岡田和子・竹中芽衣  
お問い合わせ 〒561-8555 大阪府豊中市庄内幸町 1-1-8  
大阪音楽大学 日本語ライティング支援室  
06-6334-2709（直通）  
daion304@gmail.com  
<http://ongakutokotoba.com/>  
デ ザ イン ミルヒグラフィックス  
印刷・製本 Rand graphics